



おこやま よしや

代表取締役社長 尾小山 良哉 氏

V R 技術と 5 G による未来の物産展

13

株式会社 A B A L

Data

所在地：東京都目黒区

設 立：2016年

従業員数：11人

事業内容：画像認識、位置測定、空間認識技術を活用した
ソフト・ハードウェア、映像及びCGの企画・
開発及び配信等

ここがポイント！

- 遠隔地へ移動するハードルを解消
- 複数のデバイスを横断したコンテンツを提供
- 地域の方との相互交流を可能に

1. 企業概要

株式会社ABALは、仮想空間でユーザーが自由に行動し、体験を共有できるプラットフォームを構築。DXにより、現実空間には無い新しい価値を提供している。

2. 取組の背景

観光の距離的・時間的制約を克服

観光資源は、現地で体験して初めてその魅力を感じられる部分が多い。しかし、遠方への移動に伴う労力や時間がネックとなり、観光を諦めてしまうケースも少なくない。地域の魅力を伝えるため、都市部で物産展を開催するとしても、やはり移動や出店コストが大きなハードルとなる。

尾小山氏は、こうした移動に係る距離的・時間的な課題を解決したいと考え、VR技術や5Gを駆使した観光体験コンテンツ、ABAL®システムにより、VR空間内での自由な移動や体験を可能にした。



- ▲ VR空間内でのユーザーの行動データを取得することもでき、ニーズの吸い上げにも奏功している

3. 取組の内容

東京駅近辺で実証実験

JR東日本が首都圏駅で開催していた従前の物産展は、出店者の長距離移動の負担が大きいことが課題であった。そこで、2021年3月、東京駅に隣接するJAPAN RAIL CAFEにおいて、VR技術と5Gを活用した「未来の物産展」"Hybrid Retail Platform"の実証実験を実施。カフェ内の特設コーナーに、XRで空間を拡張した青森県の観光名所を再現。現実の会場キャパシティを超えた展示を可能にした。

ユーザーは、VR空間内で観光やショッピングを楽しみつつ、地域の事業者ともチャットで交流することができるようにした。また、産品をECで買い求めることも可能であるため、事業者が在庫を抱えることなく複数拠点で開店できる点も、同システムのメリットである。

尾小山氏は、「東京に居ながら地域の人と交流し、地域の魅力を感じることで、実際の来訪に繋がる流れを作りたい」と語る。



▲「未来の物産展from青森」の様子



▲VR観光コンテンツのイメージ

4. 工夫した点

導入障壁をどう取り払うか

VRは導入障壁が高くユーザー数が伸び悩む傾向にあるが、尾小山氏は「未来の物産展」を普及させるため、位置情報と連動させることで、その地域でしか購入できない商品をVR空間でPRし、販売する仕組み「ロケーションベース・マーケティング」によるECショップを考案した。

さらに、CVR（コンバージョンレート）の高さも大きなポイントとなっている。VRコンテンツは、特性上どうしても回転率が低くなりがちであるが、本サービスではオペレーションの工夫により、回転率の低さを改善。「バーチャル空間内で手軽に商品を購入できることからCVRがとても高く、マネタイズしやすい」とも尾小山氏は語る。



▲ VR空間内のイメージ

5. 成果

地方自治体の価値提供の場として活用

2021年、地方自治体の関連事業において5件採用される。地域の価値を都市部に向けて発信・表現する場として好評であり、今後もさらに地方自治体とのタイアップ事業を増やしていくという。また、地域の人と実際にコミュニケーションが取れるため、人と人との関係においても地域の魅力を感じることができ、接客してもらった店に、実際に行きたいと思うユーザーも多いそうだ。

6. 今後の展望

世界各地で出店へ！

株式会社ABALは、未来の物産展をより多くの人に利用してもらうため、好立地な出店場所の確保に取り組んでいる。「今後は東京のみならず、世界を視野に出店していきたい」と尾小山氏は語る。

同社のサービスにより地域の魅力を身近に感じ、現地訪問の動きが拡大することを期待したい。

取組の関連情報はこちら

- ・ ABAL
<https://www.abal.jp/>
- ・ 「未来の物産展from青森」の紹介動画
<https://www.youtube.com/watch?v=wG8kONlz0nQ>